論文の内容の要旨

論文題目：日本人高齢者の国際退職移住に関する文化人類学的研究
—マレーシアの事例から

氏名：小野　真由美

本論文は、退職後の日本人高齢者の自発的なマレーシア移住・長期滞在の事例から、高齢者の国境を越えた日常生活の営みを文化人類学の手法を用いて民族誌的に記述するものである。退職後の高齢者の国際移動を研究対象として取り上げることは、国境を越えた人の移動研究において、二重の側面をもつ。すなわち、一方においては、労働力とはならない、あるいは「労働を目的としない」人の国際移動という側面をもち、他方においては、海外に長期間居住・滞在する消費者の国際移動という側面をもつ。本論文は、このような二重の側面をもつ移動の主体に観光研究と移住研究からアプローチし、移民でもなくツーリストでもない流動的な人々の暮らし方を解明することを目的とする。具体的には、1）観光と移住の中間領域にある退職高齢者の自発的な海外移住の研究枠組みを示すこと、2）国際移動による国境やマクロ構造の利用が高齢者の生活にもたらす質的変化を民族誌的に明らかにすること、3）海外移住の商品化の過程における、移動する主体と市場及び国家の相互作用を検討することによって、トランスナショナリズム論において消費者の国際移住の市場性を解明すること、の 3 つを主たる目的として設定する。

第 1 章では、先行研究を検討し、本論文全体の問題設定を行う。国境を越えた人の移動に関する従来の研究においては、労働を目的としない人の移動への関心が向けられてこなかった。国際退職移住の主体となるのは、労働を目的とせずに国外に長期居住する人々であり、移民でもなくツーリストでもない流動的な人々の暮らし方を捉える分析枠組みが必

要性となる。そこで、本論文はグローバルな人の移動の人類学における移住研究と観光研究の先行研究を整理し、移住と観光の重複領域にある人の国際移動の研究枠組みの必要性を指摘する。さらに、国際退職移住に関する先行研究を検討し、高齢者の国際移動の先進事例がみられる欧米での先行研究のなかから、「ライフスタイル移住」の概念化という人の国際移動の新たな研究動向が生まれた文脈を整理する。本論文は、日本人高齢者の国際退職移住をライフスタイル移住と定位し、観光と移住の重複領域にある退職高齢者の自発的な海外移住が発生する仕組みを、消費者の国際移動を媒介する移動産業の視点から分析する。さらに、本論文はライフスタイル移住の市場性、つまり、「人の国際移動のマーケット」の視点から、国際移動する主体による国境やマクロ構造の利用が高齢者の生活にもたらす質的変化を民族誌的に明らかにする。ライフスタイル移住としての国際退職移住を、その後の移動を含めた人生の文脈のなかで捉えることにより、日常生活を移動態として捉える視座が必要であることを指摘する。

第 2 章では、まず、日本から高齢者の国際退職移住が発生する社会、経済、文化的背景を概観し、送り出し社会の文脈を整理する。高齢者の国際移動が発生する背景として、送り出し社会である日本において、少子高齢化の進展に伴う世帯構成の変化や老後の生活に対する不安の増大という社会経済的要因を指摘する。さらに、長寿社会が大量に生み出した健康で「若い」前期高齢者の「いきがい」の創出という文化的要因もまた、高齢者の国際退職移住を発生させる要因となる点を指摘する。

続いて、日本人高齢者の国際退職移住の歴史を遡り、1980 年代半ばに日本政府主導で開始された高齢者の海外居住事業が、ロングステイ財団の設立によって民間主導へと移行し、ロングステイツーリズムの商品化によって退職後の海外移住・長期滞在が日本人高齢者に普及する過程を明らかにする。また、メディアによる退職後の高齢者の海外移住の世論形成を分析し、老後のマレーシア移住が高齢者の「自己実現」および家計戦略としてイメージ構築される過程を分析し、これらに通底する「送り出しの論理」を考察する。さらに、日本人高齢者の国際退職移住の類型として、1）日本を生活の拠点とし、ロングステイツーリズムを繰り返す「渡り鳥」型、2）国外を生活の拠点とし、年に 1〜2 回日本に帰国する「定住」志向の長期居住者、3）日本から国外に生活の拠点を移す要介護の高齢者の「ケア移住」型、の 3 つを挙げる。

第 3 章では、観光政策として外国人退職者の受け入れ制度を設けているマレーシア政府に視点を移し、国家の経済成長のアクターとして外国人退職者や患者を誘致するマレーシアの「受け入れの論理」を考察する。マレーシア政府は、マレーシア・マイ・セカンド・ホーム・プログラムと称する外国人退職者の受け入れ制度を促進するにあたり、日本を主要なマーケットとみなしており、日馬両国において日本人退職者を対象としたプログラム促進活動を活発に行っている。マレーシア観光省や政府観光局によるプログラム促進活動やその事業を担うエージェントの活動の場における参与観察から、選別化されたゲストとしての日本人退職者を対象とするマレーシア移住の商品化の過程を考察する。

第 4 章では、数日間から 3 カ月程度の滞在を繰り返す「渡り鳥」型の長期滞在者が集まる高原リゾートのキャメロンハイランドの事例から、既存の観光地が日本人高齢者のロングステイ滞在地として成立する過程を分析する。キャメロンハイランドに滞在する大多数の日本人高齢者は、日本の気候が厳しい夏と冬に、避暑避寒を兼ねた余暇活動を目的に数日間から 3 カ月間程度滞在する。このような避暑避寒を兼ねた余暇活動を目的としたロングステイツーリズムは、キャメロンハイランドでの長期滞在を啓発する NPO やサークルなどの任意団体の活動を通じて組織されている。より多くの日本人が「渡り鳥」となり、キャメロンハイランドに繰り返し長期滞在することが、地元社会と日本人長期滞在者にとって相互利益となることを指摘し、ホストとゲストの相互作用によってロングステイツーリズムが成立することを明らかにする。

第 5 章では、「定住」志向の長期居住者が集まる首都クアラルンプールの事例から、クアラルンプールが日本人高齢者の暮らしの場として成立する過程を分析する。クアラルンプールでは、日本人退職移住者による長期滞在に関する情報提供や啓発・支援活動の活発化に伴い、退職者向けのビザを取得し、マレーシアに定住する「セカンドホーマー」が増加している。増加するセカンドホーマーを背景に、その支援活動は互助組織によるコミュニティづくりとネットワーク化へと展開し、その規模を拡大している。セカンドホーマーのネットワークは、マレーシアで暮らすための知識や情報を共有する相互学習の場として機能するだけでなく、ネットワークを媒介し日本人高齢者同士が交流することによってライフスタイルや生き方自体が創造されていく側面を指摘する。

「定住」環境を整備していく過程において、クアラルンプールの日本人高齢移住者たちは、マレーシア観光省の外国人退職移住者受け入れ促進活動に全面的に協力し、日本人高齢者の誘致のために様々な活動を行っている。セカンドホーマーのミクロな実践からは、受け入れ国と日本人退職移住者の間には、ホストとゲストの互酬関係が成立していることがみてとれる。そこで本論文は、退職移住者が消費者およびゲストとしての自己の「客体性」を戦略的に利用し、政府に働きかけることによって、定住可能な生活環境を整備していく過程を民族誌の手法を用いて明らかにする。

第 6 章では、日本人高齢者の国際退職移住の普及により、患者や要介護の高齢者の新たなニーズによって生成するケアを求めた国際移動とケアの越境化の展開について考察する。日本人高齢者のマレーシア移住には、「健康な」高齢者だけでなく、ケア労働を必要とする要介護の高齢者の国際移動を伴う国際退職移住の連鎖がみてとれる。外国人退職者の受け入れに加えてメディカルツーリズム振興により外国人患者の誘致政策を実施するマレーシアでは、医療産業が外国人高齢者を対象とする介護の事業化に着手している。また、日本人高齢者のあいだでも、長期居住を念頭にマレーシア国内の介護サービスに対する関心が高まっている。このように、マレーシアにおける日本人高齢者の国際退職移住の事例には、欧米の国際退職移住の先行事例にはみられない、医療や介護を求めたケアを要する人の国際移動の側面があることを指摘する。日本人向け高齢者介護施設や民間病院における参与

観察からは、日本人退職者がグローバル化する医療やケア労働を担う人の国際移動というマクロな構造を利用し、要介護となった場合にもマレーシアで生活するための介護環境を整備していく過程が明らかになる。

ツーリストでもなく移民でもない流動的な人の暮らし方の帰結は、死を迎える場所、あるいはは埋葬される場所を必ずしも特定しない生き方である。本論文は、日本人高齢者のライフスタイル移住としての国際退職移住は、国外で死を迎える場を自ら創造していくという、新たな生き方の創造のための運動であると結論づける。

以上をふまえると、本論文の意義は、以下の 3 点にまとめられる。1 点目は、少数の例外を除いて先行研究がなく、これまで日本の人類学のなかで扱われなかった国際退職移住を取り上げ、長期間のフィールドワークをもとに民族誌的研究を行ったことである。2 点目は、日本人高齢者のダイナミックな生と日常生活の移動態を記述することにより、個から国際移動を捉える視座を示し、ツーリストでも移民でもない人の国際移動の重複領域を捉える分析枠組みを提供したことである。最後に、3 点目は、国境を越えた人の存在論的移動が新しい移動の形態を作り出していく過程における市場性を明らかにしたことである。日本人高齢者のマレーシアへの国際退職移住の事例研究から明らかになったのは、日本人高齢者にとって老後の海外移住とは、自らが追求する生き方を支えるサービスを創り出し、ライフスタイルを創造していく運動であるということであった。この運動によって、個々の移動の物語が生まれ、新たな移動の物語が再生産されるのである。